

---

# 今日から俺は魔王になる！ ?

魔桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今日から俺は魔王になる！ ？

### 【Nコード】

N5112Z

### 【作者名】

魔桜

### 【あらすじ】

主人公は慟哭と失意のまま魔王という銘を享受した。魔王となつた対価として力を手に入れた。そして、失った命を糧に敵と対面する。胸中にあるのはただ 殺戮という名の原始的な衝動だけだった。

## 異界 (1) (前書き)

これは『今日から俺は魔王になる!』の続編です。

## 異界 (1)

第二幕『見覚えのある風景』

？異界？

永きに渡り栄華を誇っていた城は、ただの瓦礫の山と化していた。一撃で城を破壊した最新鋭の対魔族破壊戦闘兵器は男の手の中で高速横回転していた。男が石突きの出っ張っている箇所を地面に突くと、回転力が徐々に落ちていきやがては静止した。

男は全長二メートルを優に超えているが、携えているその武器は男の身長の上はあり、圧巻だった。

その武器は人類最古の狩猟武器である槍に類似していた。

だが、槍頭の超非金属素材部分には人間の神経のようなものが脈打っている為、無機物というより生物に近く、不気味以外の何物でもなかった。

その男は魔族殲滅部隊・一番隊隊長。作戦実行時のコードは、『零頭未完』。常に先駆けの任を勤める一番隊最強の男であり、畏怖と尊敬の念を持って語られる科学特殊戦闘部隊の幹部である十三夜の一人である。

冷徹非情の性格故に敵はおろか仲間からも恐れられ、内外共に敵が多く、『索敵必殺』の異名を持ち、男は迷いも憂いもなく眼前の敵をただ殲滅する。

そう、その筈だった。

異界 (1) (後書き)

冷凍ミカンが食べたいなあと思いながら書いた小説です。

## 異界 (2)

零頭は舌打ちをする。

魔族の血は全て絶やさなければならぬ。

そしてそれは、魔族に加担する者も例外ではない。だが、幾多の戦場で殺し合いを演じ、それでも生き残ってきた《冥途冥土》。あの、戦いの鬼とまで呼ばれたマリイだけは殺したくはなかった。

思えばあいつとは長い付き合いになる。だが、それだけが情に流されたという理由ではない。

自分の気持ちに気づいた時には、全てを自分の手で終わらせてしまった時だった。

殺すべき敵であるあいつに、俺はいつの間にか恋心を抱いてしまった。

なのに、俺はこの手でマリイの命を摘み取ってしまった。彼女の固有特殊技能である『強制読心』は、半径五キロまで敵味方人間魔族問わず、心を盗み見ることが出来る。

その能力とあいつ自身の魔力を併用すれば、理論上全ての攻撃を避けることができる。最強に近い実力を誇っていた奴だからこそ、俺はある意味では信頼していたのだ。たとえ、俺が全力を出した攻撃であってもあいつは容易く避けてくれると無条件で信じていた。

なんとという皮肉か、相手は敵であるというのにあいつの実力は恐らく俺が一番知っていたと言っても過言ではないだろう。

だが、あいつは魔王という部外者である小僧を庇って死んだ。

外の世界の人間であるものに頼るといふ発想自体がこの世界では異端であり、それを実行に移したのはあの変人な姫様だからだろう。先代の魔族のお姫様に比べるとなんと愚かしきやつだ。そいつの単なる気まぐれのせいで、あんなに心優しかったマリイは死んでしまった。

マリイたちに攻撃さえすれば上の連中にはいい訳できる。また、

あいつ等に尻尾を巻いて逃げられましたと報告すればいい。

任務失敗の懲罰は当然だが、それさえ我慢すればマリイは生き永らえることができる。それが、敵であるあいつにできるささやかなことだ。それにも拘わらず、あいつは死んでしまった。俺が殺してしまった。

「ぐっ……」

悲しみの涙は出ない代わりに、零頭の口の端からは、一筋の赤い涙が流れた。

## ロシア (1)

?ロシア?

少女は望んでいた。

この平凡な世界の変革を。

心の内で、純粋な想いで。

「どう……して?」

少女は信じていた。

それでも自分の知る世界が変革しないことを。

それが自分にとっての真実である、と。

「どうして? パパが、パパがあっああ!」

そして、少女の願いは叶った。

思い描いた望みとは違う形で……非情にも。

少女にとって悪夢のような現実が彼女を襲う。

「……誰?」

後ろに立つ人間の気配に気づいた少女は咄嗟に振り向く。

僕はその時知らなかったんだ。この世界が崩壊することをも。

そして、今日この時既に絶望が始まっていたことを。



## 異界 (3)

? 異界?

零頭の保持している対魔尖突槍『ラフ・ランス』を限界超越可動させる。光彩を放ちながら、柄と鏢の間から槍は、興奮しているかのように白き蒸気を吐き出す。

そして、ひゅんひゅんひゅんと、耳をつんざくような光速回転音が崩壊寸前の城の前で鳴り響く。

零頭は腰を落として、必殺の刺突の構えをとる。

暴れる槍を魔力と筋力で押さえつけながら感覚を研ぎ澄ます。槍の回転力を限界まで引き上げながら探索するのは敵の気配。そして、下半身に溜めた力を一気に解き放つ。先手一度限りの突撃技。

それは、音速を超えた刺突。

並の操槍者ならば、自身の身体すら原型を保つことはないだろうが、全身に着た衝撃緩和超素材を使ったコートと、術者の強大な魔力により、スプラッタは免れている。

戦地の空気を灼熱に焦がしながら、加速してゆく。舞い上がった埃と小石は障害になり得ない。空気と砂に変わり果てる。そうまで武器の威力を底上げして、零頭が渴望するは、人を即時滅殺する、ただ最強の一撃。

零頭の刺突は、標的である魔王の身体を円状に抉りながら縦に真っ二つにする。それでも槍の勢いは止まらずに、城の支柱を三本まで破壊して、ようやく零頭の身体は止まる。引き裂かれた魔王の肉塊は其処ら中に飛び散った。回転は収束し終え、時間差で小汚い血の雨が零頭の身体に降りかかる。

「あっけない幕切れだったな」

達成感も充実感も何一つない。ただ好きな女を殺してしまった罪

悪感だけが、心の内を支配していた。つい先ほど殺した魔王は零頭の心の片隅にもいなかった。奴はただ自分の犯した罪の憂さ晴らし程度の存在だった。その瞬間までは。

「……なっ！」

だが、膨れ上がった異常な殺気に、長年戦士として魔族狩りをしていた零頭は、魔王の肉塊から距離を取る。

なんだ、これは。

零頭は自分の見ている現象をにわかには信じることができなかった。引き裂かれた片方の肉体から光が発光し、光が消えると肉体が消滅していた。もう片方の肉体も同じような蒼白い光が発光したと思うと、消滅したはずの肉体が早戻しのように再生し、傷一つ見られない完全な状態になった。

これは……煌々高速肉体再生能力！ 千年に一度発現するか否か、神のみぞ知ると云われる最強最悪の能力の一つかつ！

零頭が驚愕の余り立ち尽くしていると、魔王が瞬き一回程の速度で五百メートル程の距離を一気に詰めてきた。俺は人外である魔王の鋭い眼光に戦慄を感じながら槍を緊急再起動させ、眼前の敵に向かって放つ。

それは冷静を欠いた攻撃であり、最初の一撃よりも遥かに威力の劣るものであった。だが、それは一撃で魔族一個小隊の三分の一は一掃できるものだった。

魔王は身体を駒のように横回転して、その突きを狂気の笑みを浮かべながら皮一枚で躲す。が、躲した刹那、魔王の頬から血が噴き出す。そしてそのまま傷口に対して魔王は意に反さないまま、勢いをつけた回転肘を零頭の後頭部にぶつけようとするが、前を向いたままの零頭に、左手逆手で難なく受け止められる。

どばっと、零頭の全身から汗が噴き出る。

魔王の狙った箇所は、わざとか、そうでないのかは分からないが人体急所であり、今の威力なら例え零頭であっても、死ぬかも知れない箇所だった。しかし、零頭が慄いたのはもっと別のことだった。

それは、魔王が自分の命が失うのも厭わずに、俺に向かって来たことだ。ただただ自分の攻撃を最大限に生かすために躲す動作は最小限に抑えている。

例え、自分の肉体が自動で再生することが分かっていたとしても、それはただの人間にできる筈がない。こいつは戦い慣れているか、それとも、戦場に似た環境で生まれ育ったとしか考えられない。

零頭は短く息を吐く。

こうなったら全力で行く。相手を素人だところで舐めてかかると、たかがひよっ子に足元を掬われる事態に陥ってしまうかもしれない。

## 異界 (4) (前書き)

魔王と零頭未完の戦闘シーンです。

振り返った零頭は魔王に渾身の槍六連撃を放つが、それら全ては虚しく空を切る。

魔王はほとんどゼロ距離という近距離で、全ての攻撃を見切っていた。槍の威力が十二分に発揮できる中距離でないとはいえ、それはあまりに驚異的だ。その驚異の脅威に零頭は一つの仮説を挙げる。文献でしか見たことのない固有能力であるが故に、まだ人類が知らない部分もあるのか。もしかすると、固有能力の発現時に、ごくまれに起こるといわれている魔族細胞活性化を利用して、瞬間移動並みの縮地すら、もしかすると可能なのかも知れない。

相手は魔族の王なのだ。  
その異質な存在が生まれた瞬間、常識はずれの異常な現象が起こってもしかたない。

……それとも、五大太極拳の一つに数えられる孫式太極拳の歩法だろうか。いや、この年齢でそれを習得できるとはあまり考えられない。

魔王は今までは何の変哲もないただの人間だった筈だ。魔王を選択する際には、異世界である人間から無差別に選抜されると、隠密部隊から小耳に挟んでいる。

よって、異世界召喚した瞬間が最も大きな隙だと言える。  
だから、あり得ないのだ。

魔力に覚醒したのもつい先ほどである魔王が、隊長格である私と同等の動きを見せるなどと、恐ろしいことが現実起きるなんてことは。

零頭は瞬時に判断し、後方に距離を取る。

小回りの利く魔王に接近は不利だと考え、自分の槍が最も威力の

出る距離を保つことにした。

しかし、十分な距離を取る前に、顔を驚？みにされた。

魔王の伸びた黒い手によって。

「があッッ！」

眼前の起こりえぬ事態に対する驚愕と、強烈に顔を掴まれ、苦痛をあげる。

なんだっ、これはっ！

例え魔王であつても、身体の一部を伸縮させるなど絶対に不可能だ。まさか、これも魔王の能力なのか。

いや、それも考えられない。

いくら魔王の魔族細胞が、能力発現魔力初開放の興奮時だといつても、これは魔族細胞活性化の範疇を遥かに超越している。それに《メタモルフォーゼ》の能力者は既に我らが駆逐した。

いや、それともこいつが我らの裏切り者であり、長年探し続けている《幻術士》なのか。二つ名の多さは能力値の高さと知名度によって増える。《幻術士》の他に《無想夢想無双》、《無間無限夢幻》などの二つ名を持つあいつには何度煮え湯を飲まされてきたか。

「グオオオオオオ！」

魔王の口が頬骨の折れる音と共に、ぱっくりと裂ける。鮮血が飛ぶが、その傷も光に包まれ、再生されていく。

そして魔王は、怒り狂ったように獣の鳴き声を上げる。腕に既に生えていた黒い毛はどんどん魔王の全身を覆っていく。

「これ」

零頭が何かを発する前に、凄まじい勢いで横投げされる。あまりの威力の強さとスピードに、成す術もなく城壁に叩き付けられる。なんとか右腕で受け身をとって、衝撃を少しでも緩和するのが精一杯だ。

あまりの苦痛に悲鳴すら上げられない。零頭渾身の突きの反動にすら耐えた、耐衝撃緩和素材で作られたコートは容易く破れ、全身から出血する。

零頭は背中当たっている瓦礫の山を使い、槍を杖代わりになんとか立ち上がる。だが、その間にも魔王の全身変態は即時完了していた。

それは、まるで狼人間。

「ウオオオオオオオオオオウウウウウウ！！！！！！！！！！」

全てを震わす遠吠えのようななり声を、さっきまで確かに魔王だった者は上げる。白い歯は顔の半分程の大きさ。鉤爪は鋭利で銀色に光沢している。全長は二メートルを遥かに越え、全身は獣のような体毛で被われている。

「なんだ、こいつは？」

魔王と零頭の声がぴったり重なる。

どう……して？

いくら何でも俺と同時に同じ言葉を予想するなんて人知を超えている。偶然にしては。

「偶然なんかじゃない」

魔王の言葉に一瞬全身が硬直する。

未来予知、それとも連続時間停止による、ブラフ。いや、それは俺の胸中を読心した説明にはならない。それに、『有史跳躍』の異能力者は他に実在することが報告されている。

矢張り、考えられるとすれば、これはマリイの固有能力『強制読心』としか考えられない。だが、それは明らかにおかしい。能力を複数持つのもあり得ないが、他人の固有異能力を保持するなど更にあり得ない。

能力譲渡なんて芸当が可能ということは仮説すら聞いたことがない。それとも、魔王そのものの固有能力なのか。どちらにしても、こいつをこのまま野放しにすると後々厄介なことになる。

零頭は槍を強制限界超越即刻発動させる。

周りの土埃を照らしだす、強烈な光を槍は纏う。それは存外、槍の性能向上だけでなく、魔王の目くらましにも役に立った。

零頭の正真正銘全身全霊の突きが繰り出される。

それは、魔王の視認できる速度を確かに越えていた。超光速の突きは、本来なら魔王の魔族細胞を一遍残さず砂塵に変えていた筈……だった。しかし、槍は魔王の肌を貫くことはなかった。凄まじい音を発しながら、槍は魔王の肌の上で停止していた。

それは、魔王の魔族細胞活性によるエネルギー障壁。

零頭は一瞬竦みながらも、槍の限界値を更に超越させる。ここで引いてしまったら、確実に瞬殺されることを理解した上での選択だった。

魔王は苦虫を潰したような表情で、零頭を攻撃してくる。魔王の鉤爪は、零頭の皮膚を何度も裂く。その度に血がでるが、それでも零頭は槍を放さない。

槍は超限界第三段階に突入する。

それと同時に、槍には縦に罅が入る。現存する最大の硬度を誇る素材で作られている槍ですら、ここに来て限界を迎える。そして、少しずつ、槍は超光速回転しながら魔王の黒い肌に突き刺さっていく。血色の肉がそこら中に飛び散り始める。

すると、魔王が障壁のエネルギー膜の密度を上げる。

苦痛に満ちたその表情からは、限界を感じさせる。

そして、零頭と魔王の均衡状態が永遠に続くかと思われた矢先？全てが爆ぜた。



## 異界 (4) (後書き)

この小説を投稿したことを、一片たりとも後悔していません。なんか極度のストレスがたまると、こういう感じで壊れてしまいます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5112z/>

---

今日から俺は魔王になる！ ?

2012年1月6日17時48分発行